

令和4年度
第1回 大野市青少年問題協議会
会 議 録

日 時 令和4年8月26日（金）9:30～11:40
場 所 学びの里「めいりん」2階 洋室大

大野市青少年問題協議会

出席者 委員 10名（欠席 2名）、専門委員 2名、事務局 4名

1 開会

事務局より開会

2 交代委員の紹介

奥越明成高等学校 松田淳子委員

大野警察署 十良修平委員

大野市区長連合会 清水進治委員

3 会長あいさつ

先日、開催した青少年健全育成推進大会の中学生パネルディスカッションにおいて、子どもたちから私たち大人に対して「僕たちの声を聞き届けてくれる機会を与えてほしい」という要望があった。その環境を整えられるようにお力添えをいただきたい。

ある記事では、子どもたちの要望の中に「僕たちが大人になるまでの間に何をしておいたらいいのか」という問い掛けがあったという。皆様はどのように答えてあげることができるか。自分も考えてみたが、月並みなことしか思い浮かばなかった。その記事では、ある方が「大いに失敗しなさい。君たちの世代は何回失敗してもまたチャレンジできる」と教えてくださったということである。私自身も多くの失敗を教訓にして今日に至ることができたと思う。後悔のない人生は空虚でしかないと言っているが、今、コロナ禍で実体験が少ない子どもたちに、ひとつの教訓としてもらえたらと思う。この会議の中で今のような答えが少しでも見つければと思う。

4 議題

(1) 大野市青少年問題協議会について **資料 1**

(事務局より青少年問題協議会法、市設置条例、研修実績などを説明)

(2) 各関係機関・団体の活動計画について **資料 2**

(資料に基づき各関係機関・団体より説明)

《質疑・意見等》

会 長：コロナ禍において子どもたちに気がかりな状況が見られることがあれば、どのような対策を行っているかも含め教えていただきたい。また、ネットやSNSに関する報告もあったが、それらを含んだ積極的な活用や方向性の模索、各機関への質問などがあれば発言願いたい。

委 員：最近では、県内のコロナ感染者は1日に千人を超え、大野市でも数十人

を超えている。国の方針では全数調査をやめることとし、経済活動は止めない方針を打ち出している。この3年間の行事開催に関して、2年前はほぼ中止していたが、去年は少しずつできる事から始められていた。そして今年の計画ではコロナ前のレベルに戻ったのではないかと感じる。しかし、今までの2年間と違って、今年は確実に子どもたちの中にコロナが入ってきている中で行事を開催することになる。2学期も始まるが、行事を開催する際には、今一度運営方針を見直していただき、子どもたちにコロナが広がらないように対策を徹底していただきたい。

会長：子どもたちにとっては楽しみであるはずの2学期のスタートであるが、これが感染源になってはいけない。各機関は徹底した運営をお願いしたい。

事務局：情報提供になるが、現在子どもの感染が増えていて自宅待機を余儀なくされている中で、タブレットを使って自宅でオンライン配信される授業を見るとか、アプリ上で授業に参加するといった対応を取っている。タブレットが良かったと思う点は、今まで一步も外に出なかった不登校の子が学校の様子を見てみたいと言って使ってみたり、相談室にしながら授業の様子を見たりすることができ、人とのつながりが持てる面が見えてきたように思う。

委員：今のコロナの件について、子どもたちへの対策はもちろんだが、コロナは学校の教職員が今までやっていた教育活動に大きく影響を与えている。例えば修学旅行に行く場合、通常であれば2日目、3日目と過ごす計画を立てるのだが、コロナ禍においては「どのような対策を取るのか」「状況が変わったらどう対応するのか」「実施の判断やキャンセルはどうするのか」など、一つ一つのことをするためにエネルギーが2倍、3倍にもなっている。そのような状況を理解いただきたいし、教職員も守っていききたいと思っている。

全数調査については、近々県が動きを見せるはずである。現在、学校からは非常に細かい報告を県に上げており、それはそれで必要ではあろうが、先ほどの負担を考えると緩和も必要ではないかとも感じている。今までもインフルエンザ感染者の把握システムがあり、それにプラスしてコロナの状況把握があるので、少しでも学校の負担を減らしながらしっかりと対応を取れるように、県と相談して取り組んでいきたいと思う。

会長：いろいろな方が複雑に関係しているので、一人一人への配慮が必要だと思われる。

委員：先日報道されたとおり、大野高等学校の生徒が全国高校生プレゼン甲子園で優勝した。34都道府県441チームの中から一次選考を経た10チームでの決勝大会で優勝したものだが、非常にしっかりした発表と受け答えをしていた。あれは一年生の時に「私が未来の市長プロジェクト」

で出した提案を2年生で充実させたものである。やはり子どもたちの声、若い人たちの声をしっかり聞いていく必要があると感じた。奥越明成高等学校の生徒は、道の駅の缶バッジを作ったり消毒液の自動噴霧の機械を作ったりなどいろいろなものを提案して市政に参加してもらっている。小中学校については、再編に当たって学校生活や本人の生活などいろいろなところで彼らの気持ちを聞きながら進めていっている。

会長：子どもたちの良き心の現れ、それに伴う発見が大事である。それをどこかで評価する機会も我々青少年に関係する機関・団体で考えていく必要がある。青少年健全育成の推進大会で小山小学校の児童が発表したけど、自分が生まれ育った小山地区が大好きだと語ってくれた。奥越明成高等学校の生徒は、生徒会長として「自分たちが壁を作っている」という自己批判をしっかりとしながら、前を見据えていた。そんな非常にたくましい、そして賢い大野の子どもたちを皆で守っていかれたらと思う。

委員：本日配付の資料に、県からのモザイクアプローチというSNS関連の資料があるが、これは子ども向けの資料だと思っている。ネット問題については、ここ20年近く同じような課題が言われ続けているが、そういった中で自分は「スマホを与える親の責任」に触れることが非常に少ないと感じており、親に対してこういった問題、課題があるというPR活動をやっていく必要があると感じている。先ほどの関係機関の説明では、子どもたちに対してはいろいろと取り込まれているのが分かった。タブレットも使い方によっては非常に便利なツールだが、便利な反面、危険な目にも遭いやすいものである。やはりそれを与えた親の責任だということ、もっと保護者に対して「危険であること、課題があること」を市全体でPRしていく必要があると思うので、前向きに検討して行って今年の活動の一つとしてもいいのではないかな。

会長：各学校で保護者向けの研修の場を提供していただいていると思うがどうか。

委員：PTAが主催となってやっているものがある。児童生徒向けの研修だけでなく、それぞれの学校で保護者向けのものも取り入れている。

会長：ネットの世界は日進月歩で新たな方向に向いている。その動きを見てしっかりと対策をしていくということを皆様と共有していきたいと思う。各機関・団体で特徴のある取り組みを模索していただくことをお願いしたい。

(3) その他

- ・事務局より、福井県安全環境部県民安全課が配信する「青少年のネット非行・被害対策情報」の上半期分について紹介。各機関・団体で活用を依頼。
- ・第2回協議会は2月頃に開催予定。

5 研修会（オンライン研修）

講師：フリースクール福井スコーレ 代表 小野寺玲 氏

内容：不登校における動機づけの支援

（主な内容）

- ・福井スコーレは4年前に始めた。その前から不登校の子どもたちと関わっていたが、このままでいいのかという疑問を持ったところから始まった。子どもにとって他のこと一緒に活動する、一緒に成長していくということが何より大事だと思い、集まれる居場所を作ることとした。
- ・フリースクールはあくまで不登校支援のひとつのステップだと考えている。活動しつつ、子どもや保護者の相談に乗って、どうやって学校に戻っていただけるだろうか、次の進学先をどうしようかということを支援している。自分は民間の教育支援センターだと思っている。
- ・不登校の子どもたちには傾向があり、成績が悪い、発達障害の診断が多い、いじめ被害がある、家庭環境では一人親が多いなど背景要因がある。
- ・戦略的に動機づけをしていくことが不登校支援における共通項である。不登校の根源は、学校に行く動機が少ないことにある。子どもの辛さと不安を理解し、計画を立てて損なわれた動機を支援していく必要がある。
- ・どこにどう動機づけを行うか。子どもが踏み出しそうなステップに対して動機づけをすること。

「少しでも学校に行っておくと人の中にいることに慣れるよ」
「今後こういうことをしたいってなった時にできるから良いと思うよ」
「勉強は自分なりに少しずつ進めることに意義があるよ」
「学校に行こうとしただけですごい。またどうしたら行きやすいか考えよう」
- ・余暇について、お手伝いについて、体力づくりについて、学習について、学校への通い方について話し合うことも大事。
- ・ほとんどの子が学校に通い出すが、学校に行きながらこの福井スコーレにも通っている。
- ・動機づけの支援のためには、「先生の余裕を増やす」「スクールカウンセラーの関わる時間を重点的に配分する」「実務的な不登校支援のガイドラインを作る」ことが必要。
- ・不登校の予防のためには、地域を子どもたちの居場所にすることも必要である。対話型のコミュニティを作り、子どもたちの発言に責任を持たせ、子どもたちがお互いに意見を言い、意見を聞き、お互いに良いことを見つけられるような力を付けていけたらと思う。

《質疑・意見等》

- Q. 福井スコーレでは14名の子どもを支援しているということだが、小さい子から大きい子まで心の発達の度合いがさまざまだと思われる。このような年齢層に応じてどれぐらいのスタッフの数がいるのか。個別対応なのかグループ対応しているのか。
- A. 年齢層では、小学校高学年から中学生までが一番多く、基本はグループでの活動になる。それを基本にして、個別に相談に乗ったり気になる点を指摘したりする時間を別途設けており、組み合わせで対応している。「不登校の子どもは人が苦手なのだから個別の方が良いのではないか」と思っていた時期もあったが、個別で子どもが取り組むこと自体がモチベーション的に厳しいと思うようになった。一人でパソコンのプログラミングをするのと、みんなでワイワイやるのではモチベーションが全然違ってくるので、できるだけみんなでやるようにしている。グループ活動の中で子どもの良いところと課題の両方が見えてくるので、活動と相談が一緒になっているメリットがそこにあると思っている。スタッフは、自分とアルバイトの2名、ボランティア的に関わる者が5名の最大で計8名である。
- Q. この福井スコーレは、毎日運営されているのか。1日のスケジュールはどうなっているのか。
- A. 週に4日、火水金土の午後だけ開いている。フリースクールは、福井県ではほとんど成立してこなかった。地域的な要因もあるだろうが、福井は人口が少ない、公共交通がなく子どもが自分では移動できないため送迎になってしまう。広域的な居場所というのは基本成立しづらく、それが福井でフリースクールをすることの限界だと感じている。福井スコーレは4日開けているが、では4日来れるかという送迎するには親が休まなければならない、なかなか通えないため、週1日だけでも居場所となってもらえればと思っている。前半2時間は活動して、後半2時間は自由時間や個別対応としている。フリースクールでできることは限界があるが、なおのこと今後どういった支援が必要かを考えることに力を入れている。
- Q. 経営していく上で資金が必要だが教えていただけるか。
- A. 寄付と利用者負担をいただいている。利用者負担は、週1回の利用で月謝が1万円である。一人親減免などもあるが、月謝をいただくのが心苦しいところではあるが、経営していくために最低限必要になっている。教育は地域に関係なく、また家庭の経済状況に関係なく誰もが保障されるべきものであり、フリースクールが無くなるのが自分の理想である。その方向に不登校支援の状況が良くなっていけばと思う。